

必修教養ゼミナール(報告)

由利美智子

一、報告にあたって

必修教養ゼミを昨年前(経済)後(経営)期に亘り担当し、その間幾度かの反省会に参加させて頂いた。諸先生の御奮闘の様子をうかがいなどして少なくとも物理的な蓄積はできているはずなのであるが、しかし今年を振り返り果たして報告できる程の内容があったのだろうか。甚だ疑問を感じながら、反省している。単に本人の勝手な思い込みに従い走った結果、教養部が掲げた本来の理念の枠におさまらなかったであろう事は、自分自身充分自覚している。しかし自己反省のみに止どまる事には問題を感じ、やはり外からの様々な御批評、御批判を頂く事を覚悟しなければならぬとこの場を借りた次第である。新学期が始まり1ヶ月程が経過したが、教養部の諸先生の足を引く張る事のない様自分の不備な点をなんとかカバーしていかなばと空回りをひたすら続けながらも学生達と共に費した時が全く無駄ではなかったのかもしれない、そう思える場面に幾度か出くわした事も事実である。彼らはゆっくりとしたペースではあろうがそれを正直に証明してくれつつあるのかな等としたりもしている。唯、私はいつも自分の座標をマイナス無限大に置いて物事を見ている人間で、いわば全てがポジティブに映る。しかも一歩進んで三歩下がる様な事を研究上日常的に繰り返し続けている事情から、どんな微々たる進歩も人の数

倍喜んでしまう。相対的にはとても成功例とはいえないはずなのであるが、しかしながらそこは教養部の諸先生の常日頃からの若い者への寛大な理解に助けられ、今までのところ回りの方々から予想もしていなかった暖かい評価を頂き誠に恐縮している。

二、ゼミへのいざない

「このゼミは参加する事に意義がある。但しどう参加するか、その形は十分個人差があつて良いと考えている。毎回、できるだけ頭を柔軟にして色々な思考実験を重ねていこう。」この事は最初に学生に宣言しておく。私自身、形式はどうであれ個々人が十分に良く考えそして有意義な時間を過ごせれば良いと思っている。更に学生に対し次の事を約束する。「従って、参加しようとする意欲がわくような内容を扱えば問題ない訳であるが、様々な個性の集まりである。最初から共通の興味を見つける事は残念ながらあきらめなければならぬだろう。とりあえず、当面はこちらから題材を準備するが、題材に疑問を感じ、続ける事に不満を感じた場合には遠慮なく意見してほしい。各参加者には、この場で扱う題材の良し悪しを検討する権利があり、場合によっては話し合いの結果テーマを変え希望に沿う内容に変更する事もできる」と。こちらからもできるだけ学生が今やっている内容に納得しているか確認する事を心掛けた。

現実には各テーマに費やす事ができる回数はせいぜい三回程度であり、学生自身考えてもみなかった事を問題視するまでに至るのがやっとのようで、題材の意義を問いただす様な事は少なくとも今まで起きていない。

さて、以上の学生との約束の上でゼミを開始していく訳であるが、まづ最初二回程度は自己紹介等お互いを知り合う(例えば、今まであるいは現在問題と感じ怒りを感じている事等を述べてもらう)事に費した。二十数名がそれぞれ自己アピールするとなると、やはり一回のゼミではおさまらない。

三、三つの題材

私が準備した題材は、若いうちに一度は考えておく必要があらうと私自身心から思える以下の三つである。

(1) 「統計でウソをつく法」(ダレル・ハフ著)

これは統計的知識ゼロでも十分おもしろく読めるよう配慮されており、良くできたさし絵(マンガ)入りで抵抗なく話に溶け込んでいく。内味は題名の通りである。自分達が無意識に影響を受けている情報(これは途中経過がどうであれアウトプットが数字という表現形態をとると途端に説得力を持ってしまふ厄介なシロモノである)にもっと敏感になる必要を痛感させてくれる。学生達の受けたカルチャーショックは、予想以上であった。実はこのテーマのもとで、一般的な「だます側」と「だまされる側」の論理まで考えさせる。「近い将来、不本意ながらもだます側に立たされる可能性は決して少なくない。君はその時、自分の良心をどこにおくか?」

この題材をやり終えた頃(レポート提出を含め)学生の方に少しは大学生らしく「重いテーマ」をやってみたいという気持ち芽ばえてくる。そこで次にとりあげたのが、

(2) 「きけわだつみのこえ」

である。今日はどんな(楽しい!?)ゼミになるかと期待している学生達を前にして、今までのムードから一転させてしまう事は正直な所、まさに清水の舞台から飛び降りる様な心地であった。しかし本の名を紹介しても学生だれ一人の表情も曇らなかつた。今度もまた楽しい本に決まっていると信じて疑っていなかった様である。たいへん驚くべき事であるが、彼らにとっては題名すらはじめてなのであった。もしかすると、彼らの親達すら知らないのではないかと疑いたくなる。つくづく戦争を知らない子供の子供達である事を痛感させられる。そんな彼らと共に三回に渡り「こえ」を題材に考えていく理由は敢てここで述べる必要はなからう。唯一つ言うとするならば、自分も戦争を知らない世代ではあるが、しかし加害者意識だけはどの世代の方々にも負けないと思っている。学生達は自分が今までなぜ知ろうとしなかつたのか、というよりはむしろなぜ知らされなかつたのか、という意識の方を強く持った様である。そして戦争という異常な状態が実は、現代の一見正常(平和)と思ひ込まれている場面のそこに見えかくれしている事に多少なりとも気づいた、と言う事は言い過ぎだろうか。特に前期(経済)で「こえ」を扱ったのと同じくして天安門事件が起った。日本の犯した南京大虐殺の話と同時に扱わざる起えない誠に悲しい事態となった。その後数回に亘り事件に関する記事を全てコピーし学生に配布もした。このようなタイミングのもとで、学生達はあの戦時下の日本を決して遠く存在には思わなかつた様である。彼らなりに、憤懣遣る方ない心境に少なからずなつていたことだろう。そんな彼らに最後の時を費やして考えてみようとした題材は、世にほとんど知られていないある人物の一生の記録である。

(3) 了翁禪師小伝

時は四十五年どころか、三百数十年もタイムスリップする事になる。「他人を利する事は全てやり尽くし、生涯にわたって自己に対して極めて無欲に徹した」人物の存在を知る事は、我々にとってこれ以上の

励みはないと考える。真に徳を行なう人は陰の存在であるのか、現代において心から尊敬できる人物を知る事は難しい。(もちろんお互い人間としての弱さを認めた上で尊敬、信頼の対象となる方はたくさんおられるが)ならば過去に善行を行なった人々の功績を掘り起こすのが後の人の義務ではないか。「古人謂ふ、先徳道有り世に昭々たらざるものは後人の愆なり」

この言葉は誠に心にしみる。今の世を安泰とみるか乱世とみるかそれは、容赦なく流れ込んでくる情報をどう集約し理解するかによってその判断には個々の差はあろうが…。

ここに話の概略を述べさせて頂く。

了翁道覚禪師は、一六三〇年(寛永七年)出羽国雄勝郡八幡(現秋田県湯沢市八幡)に生まれた。二才の時に母を亡くし、父親が病身であつた事から、二度にわたり里子に出されるが行く先々で一家を死絶させてしまうという不幸な生い立ちであつた。この様な訳で周りから不吉の子、凶児とうとまれ虐待された了翁は十一才の時に隣村の密寺に投げ捨てられ、そして同郡岩井川竜泉寺に寺僕として預けられたのは十二才の時である。この少年が後に、「伝うべくして伝わらざりし隠れた偉人」としてみごとに成長していくきっかけとなつた大願発起は、奥州平泉中尊寺の荒廢を極めた姿をまのあたりに見た時であつた。この無一文の少年僧は、我が国において法宝としての大蔵經の欠けている事を嘆き、想像を絶する費用を要する大蔵經の収集という大願を発起する。(当時我国は仏教国とはいへ大蔵經を蔵するのはわづか一、二の大寺に過ぎなかつたという。)これが後の、黄檗天真開山了翁禪師、天台宗大学(現大正大学)の鼻祖、我国における真の近代的意義における、公立図書館の開始者(この公は官公の「公」ではなく「公衆」に対して公開の意)又宗派を超えた全国二十一名刹における大蔵經の建立者、そして江戸の大救済者の少年の日の姿である。戦前(大正十二年)の小学校の国定教科書により取りあげられその業が広

く知られている鉄眼禪師(「鉄眼の一切經」)は、了翁と同年でしかも、両者とも一六五四年に長崎に来朝した隠元禪師に師事した親しい法友であつた。そして共に貧しい僧侶であつたが高価な大蔵經を弘めるといふその志においては共通であつた。實際鉄眼が大蔵經の刊行を企画したのが一六六九年、了翁が我国最初の公開図書館、「不忍經堂、文庫」を開設したのは翌年の一六七〇年であるから、両者の活動はほぼ同時であつたといえる。従つて鉄眼の大蔵經刊行に物心両面の援助を了翁が借しなかつたであらう事は疑う余地がない。さて、大蔵經を納めた建立費の総額だけで二万余金の巨額にのぼつたと記されている(宇治天真院内彰徳碑記)。しかしこれは了翁禪師の偉業のひとつにすぎない。では、了翁がいかにして莫大な財を準備できたか、最も興味深い所である。了翁の取つた手段は僧侶らからせず、つまり勧募に全く依つておらず、その点でたいへん特異な存在である。完全に禪師個人がつくりだした資金にのみ依つていたのである。

了翁はそのあまりに不幸な生い立ちのせいもあつたのだろうか、想像を絶するまさに血みどろの荒行、苦行を重ね、そしてついには断根、碎指(左手の小指を碎いて油布で包み仏前の火を移しその手を堂の格子に結び右手に線香を持ち般若心經を二十一回誦通する行)といういわば大乘の教えに反するともいふべき難行をも断行してしまう。がしかし、その激痛苦によって、三十六才の時、靈藥「錦袋円」を夢の中で援かりそして大胆にも仏に仕える身でありながら上野池之端に薬舗を開き商いをして巨万の富を得、大願を成就していくのである。もちろん僧侶の立場でこの様な行動に至るには相当の障害があつた事は言うまでもない。しかしあくまで禪師の商法は「衆生済度」の方便に過ぎず、又了翁自身が薬舗からの収益金を私的に使用する等生涯を通して皆無であつた。この様な了翁の無欲、質素、節約に終始一貫した姿は、むしろ江戸の人々に好意的に受けとめられたのだろう。しかも薬舗は売薬のみならず、貧困者へは錢をそえての施薬を行なつたという

事である。本来なら批難されてしかるべき行為ではあったが江戸では評判となりますます売り上げを伸ばしていった。

我国最初の公開図書館といわれる「不忍経堂、文庫」は、「貴重な書物を生きた物として活用し一般大衆の人格向上、知識の発達に役立てよう」という信念のもとで禅師が工夫した結果の賜物である。具体的には、大蔵経を収めた経堂を中心に古今東西の書籍を集めた文庫を建てこれを一般公開し、更にここでは専門及び一般のいわば文化講座をも併設した。しかも貧しい学徒（読者）には給食までして物心両面からの糧を、永年にわたり与えたという事である。後に東叡山に建立した「勸学講院」（略して勸学院）には、更に遠隔利用者の為に寮舎を設け常設の講座の為に講堂を立て、毎日仏儒道の三教を講じた。当時としては、僧俗問わず一般庶民の為に高等教育施設は極めて稀（あるいは皆無!?）であったので、向学心に燃えた僧俗の学徒は競って集まり利用者は次第に増加し六百余人までも達していたという。常設の宗教（仏典）学術（儒老の古典）講座には、当時の有名な学者が招かれてたいへん権威のあるものだったという事であるからその人氣も納得がいく。この私設の社会教育施設勸学講院の図書購入費、講師謝礼費、修繕費、管理維持費、貧困読者への給食費等の一切は了翁一人の負担に依ってまかなわれていた事は言うまでもない。勸学院の創設、全国二十一の台、密、禅の名刹への大蔵経の寄進の他、江戸における震災、火災（天和の大火、俗に言う八百屋お七の大火）後の莫大な財を投じた救済事業、多くの孤児、貧困児の収容養育、大規模な施薬事業、貧困学徒の生活保障（千人分の僧糧の寄付）、多くの寺の再建修復をはじめとし、その次々に成就して行った社会事業の多さには、氣が遠くな

る程でとてもこの場では紹介しきれない。又いくら錦袋円菓舗の収益が巨額であったとはいえ、禅師の止どまる所を知らぬ発願はそれをも勝るものである。晩年に至るまで一貫して衣食節約に徹し日夜貯積し続けた上での成就であった事を忘れてはならない。死の直前まで惜しみなく自己を捨て去り社会に投じ続けた壮絶な七十八年の生涯は、一七〇七年（宝永四年）五月二十二日に閉じられる。

この話は学生達に口頭で紹介した。現在の我身のいたらなさを考えれば、もし指導する立場からこの話を学生に紹介したとすれば、とてもない思いあがりである。もしそうとられるとするならば、本当に穴があつたら入りたい、いや更に上から土をかぶせて埋めてもらいたいくらいである。この題材をなぜ選んだか、それは生きていく上で結局最後につきあたる問題を学生達と同じラインに並んで考えてみたいという思い、そして「このゼミを通して一体自分は彼らに何を提供できたのだろう」という良心の呵責からである。自分としては、これ以上のそしてこれ以外の心の尽くしようがなかった。学生達は、遠い過去の偉人伝を聞かされ単なる感嘆には止どまらなかったはずで自分の中にこの話をどう受け止めたら良いのか困惑したに違いない。彼らはそれだけ大人にもなっている。思えば、このゼミを通して随分学生達を困惑させ可愛想な事をした。しかしこの様な機会に、人生の最終目標をどこにおくかという一生涯における難題を、若いうちに一度は考えてみる事は彼らの永い将来において大切な事と自分には思えてならない。以上、私的感情に流され過ぎていくという御批判もあろうかと思うが、つつみかくさず告白した次第である。

（平成二年五月五日）

《参考文献》

今、了翁禪師の生誕後三六〇年にして、地元秋田で田口大師氏を中心とする、はじめて本格的な顕彰運動が起きている。利用した以下の文献一、二、三、は氏からの提供に依るものである。

- 一、嵩吉靖 「了翁禪師」 大正十年三月 中央仏教社
- 二、今沢慈海 「了翁禪師小伝」 昭和三十九年十月 成田山財団
- 三、小野則秋 「近世期における緇徒の図書館運動」 昭和四十二年九月 仏教大学文学学会人文学論集
- 四、川瀬信雄 「名僧了翁禪師伝」 昭和六十三年二月、平成元年五月（連載）女性仏教 女性仏教社